

追 悼

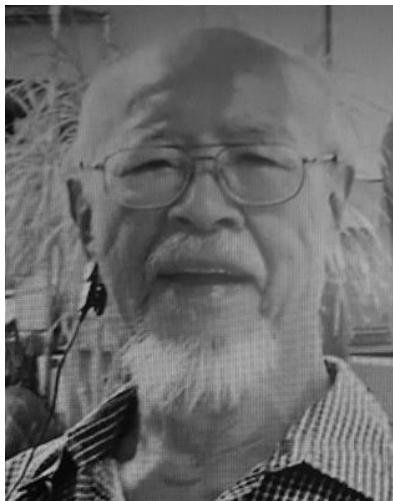
# 坂牛哲郎労働大学学長を偲んで

労働大学事務局長 飯田 邦雄

## 「坂牛教室」の発足

2021年3月12日、再建労働大学を指導されてきた坂牛哲郎学長がご逝去されました。

お亡くなりになった時、深い悲しみが沸き起こりました。思い起こすのは、学長からの薫陶を受けたこと、



故坂牛哲郎労働大学学長

そして多くの仲間が成長されていたことです。03年労働大学が再建されました。その中心を担ってくださったのが坂牛哲郎学長でした。労大再建とともに04年1月から『月刊まなぶ』が創刊されます。『月刊まなぶ』の発刊を契機として「唯物史観」について、学長からの指導が専従者を中心に「坂牛教室」として同年6月から開催されることになりました。今でも鮮明に覚えているのが学長の冒頭の言葉でした。

「旧労働大学は唯物史観が大変不十分です。そのため、学習の初めは哲学をきちんと学ぶことです。テキストは大森義太郎さんの『唯物弁証法読本』を準備して進めることにしましょう」。個人の感想は置くとしても、哲学、特に唯物史観・唯物弁証法が不十分と言われても当時の私は、ポカンとして聞いたと思います。耳学問で、同輩の山崎伸二さんからいろいろな運動論的なことについて、言葉には聞いていましたが、教室に集まった皆さ

んのように社会主義青年同盟や社会主義協会の経験がありませんでしたから、言葉が持つ中身すらも理解されませんでした。

それでも12名で椎名町のN関労務所で定期的に学習は始まりました。理論的に妥協を許さない学習会でした。私事ですが「唯物史観」のレポートの折、A3用紙三枚にまとめたものを、1〜2行だけ目を通して「飯田さんもういいです」と言われました。その後も「経済学」で「商品」のレポートした時も同様に「もういいです」とレポートを遮とどまられました。勿論、なんで学長がレポートを遮ったかについては後々理解することになります。労大学長になる前の坂牛哲郎さんが、関東ブロックチューター養成講座で「紙の無駄。立ってなさい」との怖いエピソードを聞かされたものですからハラハラしていました。後に、「あなたのレポートや宿題の表現は文学的に過ぎ、観念論的ですね」と二人だけの会話の時にも指摘を受けました。つまり科学的表現と違うと教えられたのです。

### 中央講座の中心を担う仲間たち

教室は徐々に参加者を増していき学長のお亡くなり

になった時点で32名になっていました。しかし、発足からの教室メンバー12名とその後教室に参加した全員が第一期労働大学中央講座に参加することができました。ここでは中央講座でのエピソードなどを交えて振り返ります。

学長は必ず宿題を出されます。全員が提出するわけではありませんが、それでも「唯物史観」に沿って厳しく目を通され、採点されていました。『社会を変える、自分を変える』の「経済学編」では、一番とか二番でなく私が昼食休憩で伺ったお話を述べていきます。

思い出深いのが「価値法則」についてでした。満点は確か4名くらいでしたが、満点の中の満点は柳本勝彦さんでした。今もって私の脳裏に残された貴重な示唆を含んだ解答であったと思いますが、学長に昼食時に「何故、柳本さんですか？」という「彼の論理の立て方はもちろんだが、価値法則を言うからには価値論を理解していなければなりません。彼の答案が他よりも優れているのはその理解があるからです」と申されました。

続いて徳島の東口忍さんについてです。これも学長が言われたことは「まるで学者の論文のようだね」と。強く残っているエピソードです。



労働大学中央講座

## 労働者魂を叩き込まれた受講生

そのような中央講座での指導とそれに向き合う受講生の「真剣勝負」ともいえる講座は、全国の仲間の成長に現れてきました。マルクス経済学を意欲的に学び、知力を身に付けてきました。そしてしっかりと「労働者魂」を学長坂牛哲郎さんから受け継ぎ、引き継がれたことは今後の労働大学および労働大学まなぶ友の会運動の大きな財産になりました。

## 学習方法について

自分自身はどうだったのかと自問自答した結果をこれから述べます。私は『月刊まなぶ』の編集に当初から携わりながら、最初に述べたように「古典」に向き合ったことがありませんでした。とくに社会主義に対してもマルクス経済学にしても無知であることを学長から見透かされています。

した。学習の中で難解を極めたのが『社会を変える、自分を変える』の「経済学編」でした。正直に「これを理解するにはどのような学習が必要か」とお伺いしたところ『資本論』を3回全巻読みなさい。最初の1回は唯物証法と唯物史観とは何かです。但し立ち寄りしないで読み通すこと。2回目はこれは見逃せない記述と思われるところをノートにとつても書き込みでもよいから最後まで読み通すこと。大事なことは3回目です。学者でもない限り繰り返し読み通すのは厄介だが、前回の2回目で見逃さなかった箇所を「大掴み」してみること」と言われました。この結果が『社会を変える、自分を変える』の「経済学編」(「恐慌論」は、新メガに基づいて学長が学習されたため、除きますが)でした。

尊敬する同輩の同志、山崎伸二さんは学習テキストだけで十分だといっていました。確かにその通りですが、「経済学編」の根底に『資本論』であることを初學者の私はやっと腑に落ちることになります。そして次に課題として『資本論』学習が一応済んだら『レーニン全集』から実践的課題を学ぶことですよとの指摘が今日も続いています。学長を追悼するとき、その「指導方法と指導性」は、私たちに残されたこと、何にも代えがたい「宝」でした。(いいだ くにお)